

花朝かちよう澱江でんこうを下くだる（藤井竹外ふじいちくがい）

桃花水暖送輕舟 背指孤鴻欲沒頭
雪白比良山一角 春風猶未到江州

桃花とうか 水みず 暖あたかにして 輕舟けいしゆうを 送おくる

解説 この詩は伏見あたりから舟で淀川を下ったときによんだもの。

背指はいしす 孤鴻ここう 沒ほつせんと 欲ほつするの 頭ほとり

語釈 ※花朝Ⅱ説に陰曆二月十二日のこと。花神の生まれ
た日といい、また百花の生まれる日という。※澱江Ⅱ淀川
のこと。※桃花水暖Ⅱ桃花が咲き川の水も温んでいる。
※背指Ⅱ後方の空を望む。※孤鴻Ⅱ二羽の雁。
※比良山Ⅱ滋賀県の琵琶湖の西岸にそびえる高山。
※江州Ⅱ近江の国（滋賀県）。

雪ゆきは 白しろし 比良山ひらさんの 一角いっかく

通釈 桃の花が咲き、水も温む淀川を、わが乗る小舟は流
されてゆく。ふと川上のほうをふり返ったとき、一羽の雁
が遠い空のかなたに消え入ろうとしているのが目にはいつ
た。雁のゆくてに高くそびえる比良山。その一角にはまだ
残雪が白々と輝いている。とすると、春風はまだ江州には
訪れていないのであろう。

春風しゆんぷう 猶なお 未いまだ 江州こうしゆうに 到いたらず